

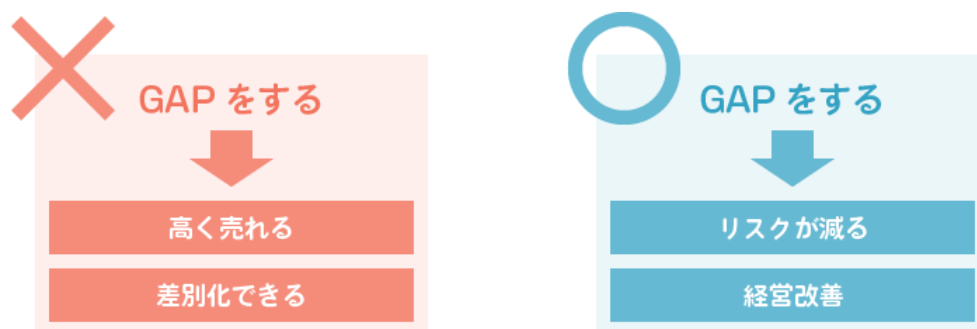
GAP がもたらすメリット

GAP の目的

■GAP をすれば儲かる？

GAP に取り組むと他の農産物と差別化ができて高く売れるようになるかという点、それはちょっと違います。

GAP は農産物を差別化するための取組ではなく、だれもが農業を行ううえで守るべき規範のようなものです。つまり、GAP の取組を行うことによって作業手順の標準化や効率化が図られ、さらに安全性が確保され、その結果としてよい農産物を作り出すことにつながります。



■GAP でリスクを管理

農業を行っていくうえで考えられるリスクには、異物混入や農薬の不適切な使用などの食品安全に関するリスク、ドリフト被害や廃棄物による汚染などの環境保全に関するリスク、農機具による事故や農薬散布時による中毒などの労働安全に関するリスク、従業員の離職やリコールなどの農場経営管理に関するリスクなどがあります。

これらのリスクの中で危害要因を特定し、それらに対する対応策を決定し、その対応策を確実に実行し、その効果を見つつ必要に応じて見直すことによって、特定された危害要因によるリスクを低減することができます。

農業者を守るためにも、次世代に経営をつなげていくためにも、GAP でリスクを管理することが大切なのです。



GAP の実践から得られるもの

では、実際に GAP に取り組むことによって、現場はどのように変わっていくのでしょうか。

■現場が変わる・経営が変わる

GAP は、農業者自らが実践する取組です。

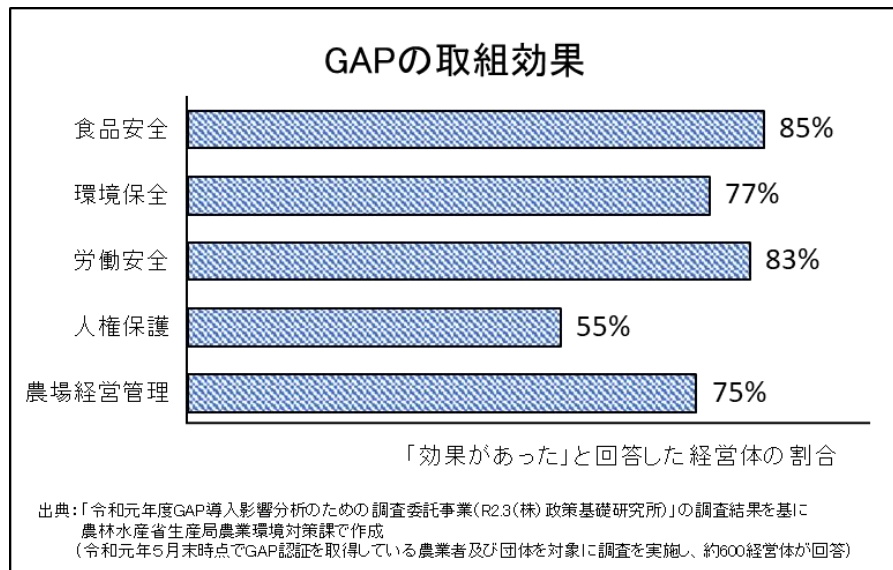
自主的に問題を見つけ、解決方法を探り、実施する、能動的な取組です。

GAP に取り組むことによって、経営者も労働者も変わります。



GAP がもたらすメリット

農林水産省が令和元年度に行った調査では、GAP に取り組んだことによって、各分野で効果が実感されているという結果が出ています。



GAP 認証が生まれた背景

■GAP 認証の誕生の経緯

GAP 認証は、1990 年代にヨーロッパで誕生しました。当時、大手スーパーマーケットは、農業者に対して農薬の使用基準などの農業生産における安全管理について細かく条件を求め、管理をしていました。しかし、農業者にとっては、出荷・販売先によって基準がバラバラなため、それぞれに対応方法を変えなければならず、非常に負担の多い作業でした。一方、大手スーパーマーケット側にとっても、世界中の農業者に対し自分たちの要求を伝え、そのとおりに作られているかどうかを確認しなければならず、大変な労力と費用がかかりました。

そこで、各スーパーマーケットは、お互いに異なるルールを見直し、安全性の確保について共通のルールを作る（標準化）ことによって、世界中どこから仕入れても大丈夫な生産工程の管理のあり方を共通化し、その取組レベルが要求レベルを満たしているかを客観的に評価するために、第三者が公正・公平に確認する仕組みを検討しました。これが GLOBALG.A.P.（グローバルギャップ）（当時は EUREPGAP）という認証の誕生の経緯です。

現在、GAP 認証は、世界中でさまざまな種類が存在します。生産地域の状況や取引先のニーズ等に応じて取組基準等が設定されていて、それぞれ内容が異なります。

日本では主に、GLOBALG.A.P.、ASIAGAP、JGAP の 3 種類が第三者認証として普及しています。

- **GLOBALG.A.P.**

ドイツのフードプラス（FoodPLUSGmbH）が策定した GAP 認証であり、主に欧州で普及しています。

- **ASIAGAP および JGAP**

一般財団法人日本 GAP 協会が策定した日本発の GAP 認証です。

